

東京藝術大学大学院博士後期課程（オルガン）

千田寧子 *Chida, Yasuko*  
学位審査演奏会

*Program*

*J. S. Bach (1685- 1750) パッサカリア BWV582*

(Mason & Hamlin ペダル付きリード・オルガン使用)

*F. Mendelssohn (1809-1847) ソナタ 第2番より Op. 65-2*

(YAMAHA 足踏みリード・オルガン2台使用) 助演：内田光音 *Uchida, Mitsune*

*S. Karg-Elert (1809-1847) 第1ソナタ より 3楽章 Op. 36*

(YAMAHA 足踏みリード・オルガン使用)

*J. G. Rheinberger (1839-1901) ソナタ 第4番 Op. 98*

*C. Franck (1822-1890) コラール 3番*

(奏楽堂 GARNIER オルガン使用)

2022年 **2/16** (Wed.)

15:30 開演(15:00 開場)

東京藝術大学構内奏楽堂 入場無料 全席指定 (要事前予約 \*)

\*ご連絡はオルガン科千田までお願いします。



## 東京音楽学校でのオルガン演奏

東京藝術大学音楽学部の前身である東京音楽学校では、1887（明治20）年の創設時からオルガンが「風琴」という名称で科目に組み込まれていました。最初期には唱歌の伴奏を目的としていたオルガン演奏ですが、早くに専門的な演奏への試みが始まりました。

1952（昭和27）年に至るまで、それがどのように変遷していったのかについて、現在東京藝術大学に残る資料を中心に調査し、研究を行いました。

この演奏会では、研究によって明らかになった東京音楽学校でのオルガン演奏レパートリーをもとに、その変遷をたどります。明治期から東京音楽学校のオルガン演奏を支えた Mason & Hamlin ペダル付きリード・オルガンを使って、明治～昭和に至る東京音楽学校のオルガン演奏史の中で重要なレパートリーであるバッハのパッサカリア BWV582 を演奏します。明治初期から楽譜を所蔵していたメンデルスゾーンのソナタは YAMAHA 足踏みリード・オルガンを2台使用して、当時行われていた「連奏」スタイルでの演奏を試みます。大正期のレパートリーの中からは、カルク=エラートの第一ソナタの三楽章をリード・オルガンの独奏で。大正期以降よく演奏されたラインベルガーのソナタ第4番、東京音楽学校の最後期に演奏されるようになったフランクのコラール3番は、奏楽堂のガルニエオルガンで演奏します。